

ポストコロナ期における新たな学び

－第12次教育再生実行会議を終えて－



千葉県南房総市教育委員会教育長

三 幣 貞 夫

三幣 ご紹介いただいた南房総市の三幣貞夫です。基調報告ということですが、私の置かれた立場で、今、何を考え、何をしようとしているのか、あるいは何をしているかということをお話しさせていただきます。よろしくお願いいたします。

教育再生実行会議の最後の第12次提言にも関わりましたが、この教育再生実行会議に参加し、いつも考えていたのは、提言する側ではありますが、大部分は提言を受ける側であるという立場に立って、教育委員会として学校として何をしていくかということが常に頭にありました。協議を進めていく中で、それは無理だとか、そんなことまでできない、というような受け止め方を多々しておりました。私自身は、千葉県の最南端に位置します人口3万人あまりの小さな市の教育長であります。最南端は最先端という思いで、いろいろな教育施策に取り組んでおりますので、その一端をお話しできればと思っております。

ポストコロナ期の教育ということですが、コロナ期以降の教育は？と聞かれますと、二つのことを答えています。一つは、全人的な教育であるということ、いま一つは、地域の子どもを地域で育てる教育、この二つを考えております。現在、教育を取り巻く流れの中で懸念していることが二つあります。一つは主体的、対話的で、深い学びという表現に尽きます、方法や手段が強調された学習指導要領の改訂であるということ。二つ目は、GIGAスクール構想で表された、思考力、判断力、表現力等の一部能力が強調された子ども観。この二つに対し、私自身は多少の懸念を持っています。第12次提言でも、データ駆動型の教育への転換が提言されております。データ化しやすい、あるいは数値化しやすい子どもの側面だけを取り上げていくのではないかと、そのような懸念を常に意識していないと、人間教育ではなくて人材教育になってしまうのではないかと、こういう懸念を具体的には持っております。

では、南房総市ではどのような教育を展開しているか、ということでお話をさせていただきます。南房総市では、他市と大きく違うところは、0歳から15歳までの保育園・幼稚園・小学校・中学校の全ての子どもたちを所管しております。従いまして、保育園・幼稚園・小学校・中学校において保育や教育、あるいは在宅で子育てをしている子どもたち、親御さんに対しても、私ども教育委員会が様々な施策を考えて取り組んでおります。また、文科省のほうには聞こえないように言わなくてはなりませんが、知育・徳育・体育ではなく

南房総市の教育～その1～

0歳から15歳・保幼小中一貫教育の推進

～子供が地域に誇りと強い思いを持ち、自己の可能性を伸ばす特色ある教育の推進～

【「知・情・意の一体」となった心豊かでたくましい人間を育む】

(1) 学力の向上

「南房総に残っても、離れても、どこへ行っても
通用する学力」の向上

スライド1-1

南房総市の教育～その1～

(2) 南房総学の推進

「南房総に残っても、離れても、どこへ行っても
支えとなる、故郷への誇りと強い思い」の涵養

(3) 非認知能力の育成

「中学校卒業まで『幼児期の終わりまでに育って
ほしい姿』」の継承と伸長

(4) ハイテクとハイタッチ、

デジタルとアナログを並立させた保育・教育の展開

「ICTと自然体験・直接体験・遊び・運動の
良さを生かした教育活動」の展開

スライド1-2

南房総市の教育～その2～

- (1) 個別最適な学びの追求
 - ① 個別最適化学習クラウドシステムの活用
 - ② タブレットの活用
 - = データ駆動型の教育への転換
- (2) 「南房総学」の推進と地域教育力の活用
- (3) 愛着形成を意識した保育と非認知能力を育成する幼稚園教育の展開と小中学校での継続
- (4) 週3日の5時間授業で
子供たちと教職員に“ゆとり”を

スライド1-3

て知情意一体の教育ということで、心豊かで、たくましい人間を育てるということを目指して四つの柱を掲げて取り組んでおります。(スライド1-1、1-2)

一つ目が学力の向上であります。南房総に残ったとしても離れたとしても、どこへ行っても通用する学力の向上。二つ目が南房総学の推進です。どこへ行っても支えとなる、ふるさとへの誇りと強い思いを涵養する。この二つにつきましては、ここ11年あまり、ずっと変わっておりません。今後も継続していくつもりであります。

三つ目につきましては非認知能力の育成ということで、中学校卒業まで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の継承と伸長」ということを掲げております。四つ目につきましては、ハイテクとハイタッチ、デジタルとアナログを並立させた保育・教育の展開です。ICTと自然体験、直接体験、遊び、運動の良さを生かした保育・教育活動の展開を目指しております。柱の後半二つの3点目、4点目についてはそれぞれ、1～2年目のものであります。これは、3年をめどに見直して、継続していくのか、あるいは変えていくのか、こういう判断をしております。

さらに、南房総市では新型コロナウイルスを機会に次の取り組みを始めております。(スライド1-3)一つ目は、個別最適な学びの追求ということで、中央教育審議会の答申と教育再生実行会議の第12次提言を受けてのものであります。具体的には、個別最適化学習クラウドシステムの活用でありまして、データ駆動型の教育への転換を目指しております。というよりも、データ駆動型の教育を取り入れるようにしております。一部であっても取り入れてまいりたい、そんな思いでおります。具体的には、これはタブレットの活用ということになっております。

二つ目につきましては、南房総学の推進と地域教育力の活用であります。三つ目は、愛着形成を意識した保育と、非認知能力を育成する幼稚園教育の展開と、小中学校の継続で

南房総市の教育の根底にあるもの

- (1) ナショナル・スタンダードと
ローカル・オブティマム
- (2) 令和元年の台風被害と
令和2年から3年にかけての渇水
- (3) コロナ禍
- (4) 戦後教育の見直しと
日本型学校教育の進化

スライド1-4

あります。今、私どもの子育て環境の中で非常に大きな問題になっているのが、愛着形成のなされていない親子、この関係が非常に大きな影を落としております。四つ目といたしましては、来年度早々からの実施を目指してございまして、週3日の5時間授業で、子どもたちと教職員にゆとりを持たせようとしております。

これらのことの根底としておりますのは次の四つの事柄があります。(スライド 1-4) 一つ目は、ナショナル・スタンダードとローカル・オブティマムという考え方でありまして。二つ目は、令和元年の台風被害と、令和2年から3年にかけての渇水。三つ目がコロナ禍であります。四つ目は、戦後教育の見直しと日本型学校教育の進化ということを根底に置いております。

まず、一つ目のナショナル・スタンダードについてですが、私どもが考えておりますナショナル・スタンダードとしましては、保育所につきましては保育指針、幼稚園につきましては教育要領、小中学校につきましては学習指導要領、さらには令和3年1月26日付の中央教育審議会の答申、そして令和3年6月3日付の教育再生実行会議の第12次答申をナショナル・スタンダードとして位置付けております。もう一方のローカル・オブティマムとしては、南房総市の最適な教育ということで考えております。この根底には、一つには地方分権一括法の施行から20年を経過しているということ、さらには、制度改革がありました総合教育会議です。首長と教育長が一緒になって教育について考える、というように制度が変わってきている。このことがローカル・オブティマムの根底の一つであります。

もう一つの拠り所になるものが、南房総市の経済的、社会的、文化的背景の、あるいは文化的基盤の弱さであります。これは避けて通れない問題でありまして、これは、国、県がどういう教育施策を立てようとしても、私どもの市が抱えている問題についてはカバー

しきれないと思っております。国、県がどういう施策を立てようとしても、子どもは子どもとして必要な施策を打っていかなければ、責任ある教育は展開できないと考えております。

次に、根底にある二つ目ですが、令和元年の台風被害についてです。今から2年3カ月ぐらい前になりますか、令和元年9月、大きな台風に見舞われまして、多くの家屋の損壊、あるいは長い地区では2週間ほど停電が続きました。パソコン、スマホ、そういったものが一切使えない状況が早い所で3日ほどですか、電波の届く所へ行かないと使えないという、そういう状況が続きました。停電の続いた家では2週間ほど、子どもたちは家に帰ると電気がつかない生活をしていました。

さらに、ちょうど1年前ですけど、ダムの水がなくなるということで、毎日、今日にも明日にも断水するという、非常に辛い経験をしました。水の大切さをしみじみと感じた2カ月を送っております。結果的には、様々な努力がありまして断水は避けることができ、雨も降りその苦勞から解放されたわけですけど、私どもに影響を及ぼすものは決してコロナだけではないということを、しみじみ知らされたのがこの2年半ほどです。

今ある当たり前の生活が決して当たり前ではない、この便利な生活というものは非常にありがたいものだ、と。今の生活が当たり前ではなく、電気や電波が止まったときの、人間の本来の力を発揮せざるを得なくなったときの生活が、当たり前の生活なのではないかなと、極端に言いますと、そういうことまで考えております。自然の怖さを知り、あるいは、科学に頼りきることなく謙虚に生きる姿勢、これらを大人も子どもも備えていかなければならない。さらには、便利なものがなくなったときの根源的な生きる力。色々なところで「生きる力」ということが言われていますが、全てが無くなったとき、生きる力、生き抜いていく力とは何なのか、そういうことも考えております。

続きまして、コロナ禍で考えたこととありますが、コロナ禍で感じたこと、考えたことはたくさんあるわけですけども、まず一番大きかったことが、マスク一枚手に入らない日本という国、ということのを非常に痛切に感じました。ちょうど1年半前に3カ月にわたる休校期間が明けるときに一番困ったことが、子どもたちにマスクがないということでした。学校を再開しようとしているけどマスクがない。非常に困りましたが、地元の縫製会社、シャツの生地を材料にしまして、幼稚園から小中学校の全ての子どもたちに2枚ずつマスクを提供していただきました。

このとき感じたのは、マスク一枚すら手に入らないというのは先ほど申し上げたとおりですけど、さらには、アルコールもなかなか手に入らない状況。子どもたちが登校してきたときに消毒をどうするのか非常に不安な時期を送ってございました。ただ、現在どうなっているのかと申しますと、生活必需品が手に入らない、日本がもうものづくりの国ではないのだというようなことが忘れられて、いつしかまた、色々なものがいつでも手に入るのだというような、日本人の意識については若干、不安なところを感じております。

これはやはり、日本人の賃金が安い上に、それでもさらに賃金の安い国を求めて、ものづくりを求めていく経済界の在り方、あるいは、大型店舗の法律が変わり、いわゆる大規模の商業施設ができました。そのせいだけでもないとは思いますが、そのために個人商店はほとんど壊滅状態であります。ですから、私どもの地域のなりわいがほとんど壊された状況になっております。

これは、いわゆるグローバル化の一つの表れではないかと思っております。経済の見直しも、時々聞こえるようにはなっておりますけど、翻って教育の中を見ても、グローバル化が疑いもなくいいことなのだ、というような方向で進んでいるような気がいたします。果たして、グローバル化を求めた結果、地元のなりわいが壊される状況を考えたときに、子どもの教育についても、果たしてグローバル化の先にあるものとしては、子どもたちの能力を、可能性を十分に発揮するような世の中があるのかどうか、そういったことについては非常に疑問に感じております。

そして、このコロナ禍で感じたことですが、教育というのは人が人を感化することだ、と感じております。といいますのは、一斉休校中に1カ月間、給食センターで作りましたお弁当を各家庭に配布しました。2日に1回しかできませんでしたが、温かい給食を家庭に配ったときの、手渡すときの教職員と子どもたちの涙ぐんだ表情とか、そういうものは、やはり教育の根幹にあるものだと感じました。あるいは、先ほど申し上げました台風のときには、全ての子どもたちの家の家庭訪問を教職員にしてもらいました。午前中に家庭訪問しまして、かなりきつい状況にある家庭につきましては、午後に再度、水と食料を持ってお邪魔しました。非常に感謝されまして、そこでも教員は今まで感じなかったものを新たに感じたように思います。

もう一つの、戦後教育の見直しと日本型学校教育の進化ということです。戦後、新たな教育が始まり76年になるかと思えます。私自身は、教育を受ける側で18年間、教育をする側で、携わる側で50年が経過しております。これまでも振り返ると、その時々々の教育論は全て、アメリカあるいは欧米の教育理論が、あるいは教育方法が取り入れられたように思います。誰かが持ち帰った、アメリカのどこかで行われていた、あるいは、いつか行われていた教育方法が日本に取り入れられて、それが繰り返されていたような気がいたします。

アメリカの、その教育理論がどこの地区でどういう成果を上げたのか、そういうような検証がされないまま、あるいは、そういう結果が知らされないまま、学校あるいは教員の中に、その教育方法、教育理論が導入されていたのではないかと思います。アメリカあるいは欧米の教育をフィルターにして日本の教育を考えるのではなくて、日本のこれまで積み上げてきた教育を、あるいは結果を、もう一度、分析・見直しする時期であるかと考えております。

教育再生実行会議に代わりまして教育未来創造会議というものが立ち上がりました。この趣旨に「わが国の未来を担う人材を育成するために」ということが書かれております。ですから、明らかに、人間を育成するのではなくて人材を育成するための方法的なものが、この会議で話し合われる、そんなことが明確に打ち出されております。私どもとすると、やはり、人材育成ではなくて、あくまでも人間教育であるべきだ、こういう思いを一層強くしているところであります。

四つ目としまして、先ほど向山学部長の話にも、子どもたちが非常に窮屈な生活をしているというお話があったかと思えますけど、小学校4年生から中学校3年生まで、毎日、6時間授業で学校生活を送っております。市内の小学校では週30コマの授業が実施され、いわゆる、子どもにとっても教員にとっても、空き時間のない状況が続いております。子どもたちの学校生活に余裕がないだけにとどまらず、これまでの日本型学校教育を支えて

きました校内研修、あるいは、授業研究の実施が非常に困難な状況になってきております。週1回の校内研修を設定するために昼休みを返上し、あるいは短縮授業を行って校内研修を確保するというような無理な状況も出てきております。

そこで、子どもは来年4月1日を目指して週3日は5時間授業の日をつくるという、単に夏休みの短縮に結論を持っていくのではなく、今まで取り組んでいたものの無駄というものではなかったと思いますけど、現在の置かれている状況の中で何をやらなくて済むのかとか、あるいは、今まで20時間かけていたものを10時間でできるものはないのかといった見直しを進めております。今、各学校で取り組んでおりますけど、いろんなアイデアが出てきておまして、昼休みを60分にするとか、あるいは、午前中30分、お昼休み30分、合わせて1時間、子どもたちが外で活動できる、集団で活動できる時間を確保しよう、こういう案も出てきております。

私の考えとしましては、中学生も5時間授業を取り入れていきたいと思っております。5時間で部活動のない日に英検のための外部の講師を呼んだ講座を開くとか、あるいは、従来6時間目にあったコマを使って、希望者にプログラミングの学習をするとか、今までできなかったものをやっていきたい。さらには、5時間が終わって2時半ぐらいから2時間の部活動を行い、教員はまた職員室へ帰ってくる。これらによって日本型学校教育を今まで支えていた協働性とか、あるいは授業研究を通して引き継がれていった教育技術、そういったものも継承できるのではないかと、考えております。

以上、急ぎ足で大変申し訳ありませんが、ご質問等がありましたらまた後ほどいただきたいと思っております。以上で私の報告を終わります。ありがとうございます。